



■ 価格 八千代
渋谷 典子 著
■ 生活書院
■ 2009年初版
■ 2,200円(税別)



女性たちの大学院 —— 社会人が大学院の門をくぐる時

本書は、NPO法人参画プラネットが企画し、名古屋市男女平等参画推進センターで行われた「社会人が大学の門をくぐる時」というフォーラムをきっかけに生まれた。1つの催しが新たな人間関係を生み、関係をつなごうという思いが本という形を成したものであり、参画プラネットのつなぐ手法が鮮やかに發揮されている。

職業キャリア直進型ではなく、仕事・家庭・社会を行き来しながら社会経験を積んできた8人の女性たちが、大学院の門をくぐった経験を生き方と描く。各々のタブレットは、「学問と社会的実践のコラボレーション」、「大学院は未知の人生を生きるためのソリューション」と魅力的である。専門的知識を学び、これまでの経験を理論と結びつけ、大学教員となった女性もいれば、NPO法人を立ち上げた女性もいる。彼女たちに共通するのは、日々の中で解決したいと望む課題がジェンダーに根ざしていることに気が付いている点である。だからこそ、さまざまな障壁を乗り越えながら、熱い想いを持って学び続ける。

ジェンダー感覚を持つことは、研究の原動力になるということ

を教えてくれ、大学院の門前で迷っている人に門をくぐる勇気と元気を与えてくれる一冊である。

社会人女子学生

大学院生のうち社会人は、修士課程で女性1万人、男性1万人(12.2%)、博士課程では女性8千人、男性1万5千人(33.8%)である(平成21年度)。女性が社会人として大学院の門をくぐることも、もはや珍しいことではない。本書では、大学院に入学する女性をあえて「社会人女子学生」と呼ぶ。彼女たちは「職場的な収入」はなくとも仕事やボランティア、結婚、出産、介護など多様な経験を積んだ社会人であり、その豊富な経験ゆえに「学びの場に創造的に対等にかかる」存在として、大学教育を変革する可能性を持つ者と定義している。

高橋 由紀(独立行政法人国立女性教育会館国際室研究員)

靴を売るシンデレラ

ジエナは離婚した母と妹の3人暮らしの大柄な高校生。母と離婚した父はアルコール中毒症で今でもジエナに付きまとつ。娘にも生き方に自信がなく暗い毎日だけれど、アルバイト先の大手靴店では特別な才能を発揮する。「どの靴も自分の物語を持っている」と、真心を込めてお客様にぴったりの一足を勧める。

そんなジエナを見込んだのが、もうけ主義の皇子から社長の座を奪われたが如きある靴店社長の老姫。ジエナは彼女の運転手として雇われる。会社の未来を決めるたキサスに向け旅に出る。頑固で口も堅い社長だが、靴とお客様への熱い思いはジエナと同じ。品質と誠実を売る社長の可能なアシスタントとして、ずるい大人と戦い、尊敬できる大人を守っていくことで、知らぬ間に自分の道を切り開いていく。

貧しく、美人でもなく、親からも虐待された子であるが故の強さが、人を見下す態度を広げ、困った時の知識を発揮する力となる。欠点を長所に変え、変身していくジエナ。年を取っても、病は

あっても、独り身でも、信念を持って凜として生きる社長。2人は世代の違いはある「現代版シンデレラ」に違いない。

現代版シンデレラ

「シンデレラ姫は、長い闇、グリム、ベロの言説として眠り醒めてきた。『お嬢様』や『結婚』にあこがれる少女にとって夢のような物語だ。しかし、現実の闇は深い。王子様は待っていない。現実の生きのいい生き方はいや！」現代版シンデレラ」は子どもの本の世界でも続々出現し、多様な個性を見せてくれる。憎み、傷つき、失敗しながら、それでも希望とユーモアを持てず困難を乗り切り、その魅力的な生きざまで幸せをつかみ取る。「現代版シンデレラ」の幸せの中身は、ひとつそれぞれ。王子様はいいでもないかもしれないのだ。

(著者) 草谷 桂子(児童文学作家)



■ ジョーン・パウラー 著
■ 灰島 かり 訳
■ 小学館
■ 2009年初版
■ 1,500円(税別)



叢書・いのちの民俗学1 出産 —— 産育習俗の歴史と伝承「男性産婆」

「産婆」と聞くと、一体どのような人物を想像するだろうか。おそらくほとんどの人は、年輩の女性を思い浮かべるに違いない。そんな先入観を再考するきっかけとなるのが本書である。

本書は、「出産儀式」「産育の歴史」「伝承・男性産婆」の3部から構成されているが、紙幅の関係からここでは主に「伝承・男性産婆」に注目したい。

筆者によれば、日本では近代産婆が登場する以前、男の出産介助者が存在したとい。筆者は、従来の民俗誌の記述や「男性産婆」の子孫および男性産婆に助産を頼んだ女性たちから聞いた話を丁寧に紹介。男性産婆は決して特殊な事例ではないと結論付ける。

男性産婆の誕生背景はさまざまであるが、いずれも社会で承認され、信頼された存在であった。だが、「産婆規則」が施行され、近代化とともに出産が国家の管理下に置かれる中で、男性であり、免許を持たない男性産婆も淘汰された可能性があると指摘している。

従来、出産は女性の世界であり、近代医療の普及とともに

施設分娩が増加し、出産介助者は男性医師に取って替わられたことがとく強調されてきたが、本書を通して、これまで目見とされた「出産は女性の世界」という言説を再検討することができるのではないか。

産婆規則

1899年に制定された規則。1874年の医制の制定によって産婆が職業として認定されたが、その業務範囲も限定され、全般的な看護には至らなかった。そこで新たに受けられたのが産婆規則である。当時、富国強兵政策のため、政府は人口増殖と聞る助産業の整備に乗り出し、近代的な助産知識などを授ける産婆養成所の開設を始め、「女性尊厳としての産婆の育成を目指す」として、20歳以上の女子で、産婆試験に合格し、産婆名簿に登録されていることが産婆業務を行う条件とされた。1910年の制定では、産婆養成所を卒業した者に対して助産許可が与えられることとなり、以後、国家と近代医療の介入によって産婆の新旧交代が進んでいった。

穀部 美里(名古屋大学大学院国語文化研究科博士後期課程)



■ 板橋 なつ 著
■ 日本出版評議会
■ 2008年初版
■ 700円(税別)



政治理論とフェミニズムの間 —— 国家・社会・家族

本書は、政治理論とフェミニズムとの結東点が公/私区分と「政治」概念であるという認識に立ち、両論理の間で「政治について論じた書である。フェミニズムは1960年代以降、個人的なことが社会的・政治的に取組みでない状況に対し「NO!」を突き付けてきた。とはいっても理論的に「政治」と真正面から向き合ってまで本の登場を待たねばならなかった。

まず、フェミニスト政治理論家(A.ドーウキン、J.ノトラー、L.ヤング)の「政治」概念を分析し、各理論の相違点が「政治とは何か」という点にあることを明らかにし(第1章)、フェミニズムが告発してきた公私二元論に批判的な諸理論を丁寧に検討した上で、「公と私は質的に区別されるべきである」と論破する(第2、3章)。次にこれまで有効勞働との関連で理解を試みた「政治的シティンギング」を「公/私の領域区分にからむる性差別による性差別的な隠喩的構造における性差別の是正・解消だけではなく問題が解決しない」と、さらに「公/私区分は女性が就職することは個人のこととして周縁化する政治的偏り」していることを明らかにし、公私二元論に対する批判を生み出していた。

個人的なことは政治的である(The Personal is Political)
私的領域における個人的な問題にこそ性に基づく差別や不平等が存在していること、家族間の個人的な問題は、実は政治的な支配構造の一環であることを訴え、80年代後半に起ったラディカル・フェミニズムのスローガン。以降、現代社会における性差別的な隠喩的構造における男性支配に根柢を持つことから、公領域における性差別の是正・解消だけではなく問題が解決しないこと、さらに「公/私区分は女性が就職することは個人のこととして周縁化する政治的偏り」していることを明らかにし、公私二元論に対する批判を生み出していた。

渋谷 典子(特定非営利活動法人参画プラネット代理理事、桜学園大学非常勤講師)



■ 田村 哲樹 著
■ 昭和堂
■ 2009年初版
■ 3,000円(税別)



新訳・ナイチンゲール書簡集 —— 看護婦と見習生への書簡

本書は、ナイチンゲールが1872年から1900年にかけて若い看護婦と見習生に宛てた書簡を集めたものである。ナイチンゲールといえば近代看護の先駆者であるが、書簡の中に書かれていることは科学的、合理的な看護法の伝授ではなく、良き看護者としての生き方である。病院は「神の王国」と例え、看護婦は「聖母」に似い、貧しい病人に対して誠実に行動するよう繰り返し説いている。彼女は何故か若い看護婦に、聖母の教えを薦めが必要があつたのであろうか。

1860年代の英国は産業が発達し、大英帝国として繁栄を極めた。しかし、巨大化する都市には無職者や低賃金労働者などの貧民とその病人が溢れていった。貧民院に病院が増設され、貧民救済費が支出されていたにせよかわらば災害はがちで、なかつた。ナイチンゲールはその原因をクリミア戦争などの体験から知っていた。英國社会は性別中心の階層序列社会であり、下層階級の貧民への思いやりに欠ける社会であるということ。

そのような社会に対してナイチンゲールは、キリスト教信仰と聖

書を前面に掲げ、思いやりと慈悲に富む「神の王国」を病院に建設しようとした。それを実現できるのは、社会の階級に置かれていたが故に研ぎ澄まされる公正な判断力と慈悲心を持つ女性であり、訓練された看護婦であった。女性中心の確立した管理理念構造の中で、ナイチンゲールの「神の王国」構想は公正・平等かつ柔軟な社会の実現への確実な第一歩だったのである。

本書は、これまで書き出されたナイチンゲールの男性中心社会への対抗的思想を読み解くことができる1冊である。

神の王国

本来キリストに従事者が創り出す國のことをいうが、ナイチンゲールの場合は、「神のために生き、神を私たちの目標とする者」が公正・平等な判断力と慈悲心を持って、万人の命を救うために看護を行なう病院や医療施設を意味する。

(著者) 徳永 香(日本赤十字九州国際看護大学特任講師)



■ フローレンス・ナイチンゲール 著
■ 清潔 ます 他 訳
■ 現代社
■ 1977年版(1977年初版)
■ 1,500円(税別)

